

# 和歌山県立

もん じょ かん

# 文書館だより

第58号 令和2年9月



濱口梧陵像（県立耐久高校所蔵）

県庁、耐久高校にある銅像の  
原型となる石膏像



耐久社『掲示』（稲むらの火の館所蔵）



耐久社『学則』（県立耐久高校所蔵）



『渋谷家文書』のうち  
「夏の夜かたり」  
（稲むらの火の館所蔵）



中根文庫のうち災害関係資料（県立串本古座高校所蔵）

令和元年度

「和歌山県歴史資料アーカイブ」収集資料の紹介

◆和歌山県歴史資料アーカイブ

和歌山県立文書館では、過去の和歌山を記録した古文書や写真など、貴重な歴史資料の散逸・消滅を防ぎ、広く親しむ機会を提供することを目的として、平成三十年に「和歌山県歴史資料アーカイブ」を開設しました。

これまで、当館で所蔵する資料を中心に公開してきましたが、昨年度から県内の公的機関の協力のもと、資料の調査と収集を進めてきました。

ここでは昨年度収集に協力いただいた、

- ・ 稲むらの火の館所蔵 「渋谷家文書」
  - ・ 県立耐久高校所蔵 「耐久梧陵文庫」
  - ・ 県立串本古座高校所蔵 「中根文庫」
- について、御紹介します。

稲むらの火の館所蔵 「渋谷家文書」

令和二年は、「稲むらの火」でよく知られる、濱口梧陵の生誕二〇〇年にあたります。そこで、当館では濱口梧陵に関する資料の公開を模索していました。第一弾として、広川町の稲むらの火の館が所蔵する「渋谷家文書」を借用し、デジタル化作業を行い、梧陵の誕生日を祝して、令和二年六月十二日「和歌山県歴史資料アーカイブ」で公開しました。

◆濱口梧陵の生涯

梧陵は、文政三年（一八二〇）六月十五日、濱口七右衛門の長男として誕生し、その後本家へ養子に入り家督を相続、明治十八年（一八八五）渡航先のニューヨークにおいて六六歳の生涯を閉じました。その間、家業の醤油醸造業を営みながら、学問や武芸に励み、また郷里の人々のために尽くしました（表1）。

特に嘉永七年（改元して安政元年、一八五四）に発生した南海地震における活躍はよく知られるところです（後述）。

表1 濱口梧陵略歴

年号	西暦	年齢	出来事
文政三年	一八二〇	1	六月十五日 誕生
天保三年	一八三二	12	本家へ養子に入る
嘉永五年	一八五二	33	私塾、稽古場を開設
嘉永六年	一八五三	34	家督相続し、備兵衛を襲名する
嘉永七年 安政元年	一八五四	35	十一月五日 安政南海地震
慶応二年	一八六六	47	稽古場を耐久社と命名
明治二年	一八六八	49	紀州藩勅定奉行となる
明治三年	一八七〇	51	家業を退き梧陵を名乗る
明治十年	一八七九	60	和歌山県初代県議会議長となる
明治十八年	一八八五	66	渡航先のニューヨークで死去

稲むらの火の館展示要覧をもとに作成

◆渋谷家文書の概要

渋谷家文書とは、旧有田郡広村（現広川町広）に所在した渋谷家に伝わった古文書です。『広川町誌』によると、渋谷家は屋号をナゴヤ（名古屋）といい、手広く事業を行っていたようです。

古文書は、渋谷家の邸宅を整理した際に仏壇の引出しから二三点が発見されました。その内容は、書状や履歴書を中心とした渋谷家の来歴を伝えるものであることがわかりました。

なかでも資料番号1

「夏の夜かたり」には、稲むらの火や広村堤防についてのエピソードが記録されており、特に貴重なものと言えます。この「夏の夜かたり」を記したのが、明治時代に実業家として活躍した渋谷伝八（天保十一年、一八四〇〜明治四十三年、一九一〇）です（表紙写真）。

「夏の夜かたり」は、伝八自身の実体験や見聞をもとに、広村の幕末から明治にかけての歴史がまとめられています。明治四十二年（一九〇九）九月に県が「郷土誌編さん要項」を定めたことをきっかけに執筆したのでしょう。

この「夏の夜かたり」は、梧陵の功績のみならず、広村の歴史を知る上でも重要であると考えられることから、原本の



写真1 国史跡 広村堤防  
現在も防潮堤としての役割を果たしています。

画像だけでなく、くずし字を活字にした翻刻も公開しています。

では、「夏の夜かたり」から、安政南海地震の記述や梧陵と伝八の関係と広村の歴史についてみていきましょう。

◆梧陵と安政南海地震

安政元年十一月五日（一八五四年十二月二十四日）午後五時頃、紀伊半島沖を震源とする南海地震とそれに伴う津波が発生しました。襲ってくる津波から命からがら逃れた梧陵は、逃げ遅れた人々のために「稲むら」（積み上げられた稲むらの束）に火を付けて避難路を示しました。「稲むらの火」の物語としてよく知られるエピソードです。

ほかにも梧陵は、復興時における、広橋の再建、仮小屋（仮設住宅）の建設、広村堤防工事の陣頭指揮をとりました。この広村堤防は、津波の予防はもちろん、被災した村人たちの就労支援と租税免除を名目として建設されたと言われてきました。「夏の夜かたり」には、以下のよう

に記されています（写真1）。  
広村ノ租税ヲ軽減スルノ方法トシテ佃格ノ高キモノヲ◎堤防シキ地トナシ置キ其後海嘯堤防ト云フ名目ノモトニ之レヲツツシ且ツ破壊家屋ヲステル場所ヲ兼ネテ  
つまり、広村の租税（土地に対する税金）を軽減する方法として佃格（土地代）の高い場所を堤防の敷地とし、その後海

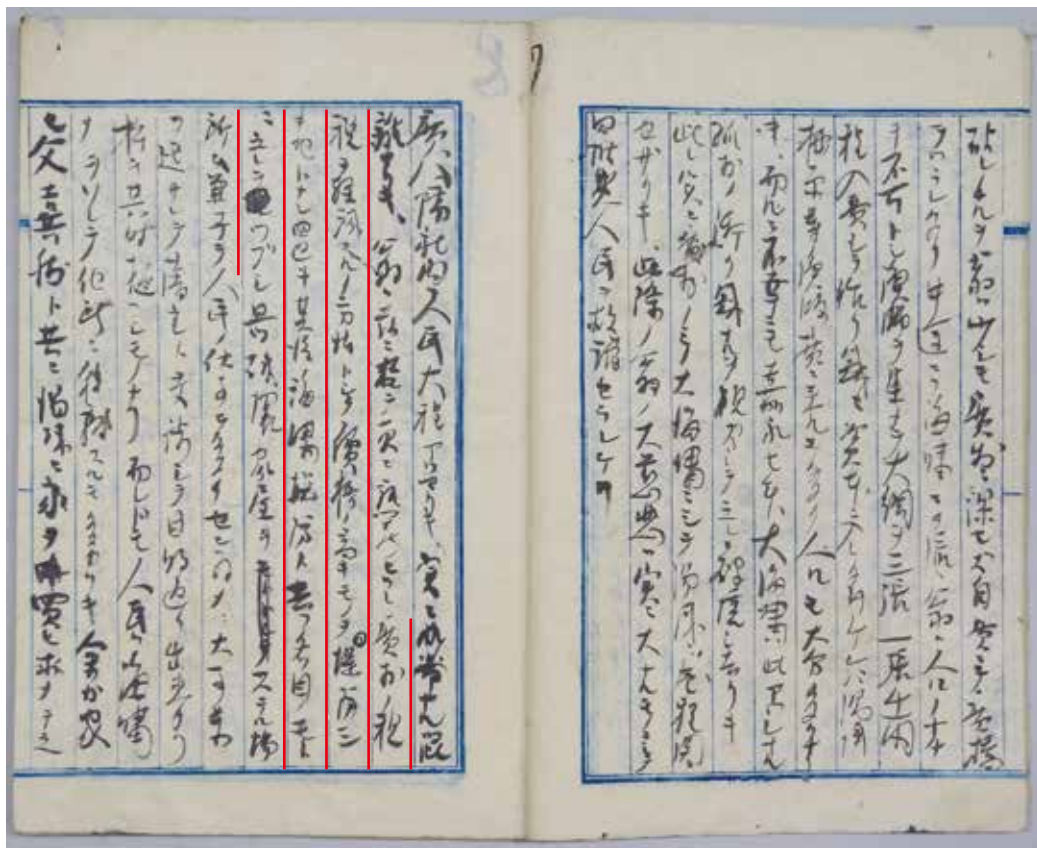


写真2 稲むらの火の館所蔵「夏の夜かたり」  
（公開している画像は、マイクロフィルム撮影による白黒画像です）

嘯堤防（防波堤）という名目の下に土地を潰し、かつ（地震と津波によって）破壊された家屋等の廃棄場所を兼ねた」とあります。（写真2、赤線部分）  
広村堤防は、国の史跡に指定されていることから、今すぐ掘り返して真偽を確かめることはできませんが、いつも広村発展のために尽くしていた梧陵なら、いかにも考えそうなことです。

また、伝八は、

「ツナミ」ニ「ススキ」ヘ火ヲ付ケ

シ如キハ決シテ大恩ト云フニアラ

ズ広村永遠ノ救済策ヲ講セラレシ

コトコソ大恩有之所謂ナリ

と、「稲むらの火」（ここでは稲むらを『ススキ』と表現）は、決して大恩と言える

ものではなく、広村永遠の救済策を講じられたことこそが大恩のいわれである」と述べています。

では、「広村永遠の救済策」とは、いったいどんな策だったのでしょうか。

◆広村郷土史としての「夏の夜かたり」

ところで、「夏の夜かたり」というのは、表紙に書かれているタイトルで、1ページ目には「広村郷土史」とも書かれています

とおり、この冊子には安政地震や津波に関することだけではなく、幕末から明治にかけて渋谷伝八が見聞した広村の歴史が記されています。

梧陵は、安政地震以前から広村の発展を企図して、漁師の誘致や広橋の架け替え、異国船襲来に備えた浦組の編成と「稽古場」の創設などを行ってきました。さらに地震後には、広村堤防の建設、明治

期には広商会の設立など村の教育・産業

振興について取り組みました。

伝八は、梧陵の将来を見据えた対策を「広村永遠の救済策」と考え、これこそが「大恩」であるとしたのでしよう。

◆杉村楚人冠も参考にした!?

梧陵の生涯や業績を調べる時、よく用いられるのが、大正九年（一九二〇）に出版された、杉村楚人冠の『濱口梧陵伝』（以下、『梧陵伝』）です。

著者の杉村楚人冠は、本名を広太郎

といい、元紀州藩士の子として明治

五年（一八七二）に誕生、同二十四

年（一八九一）和歌山新報社に入社し、

ジャーナリストとしての第一歩を踏み出

しました。

楚人冠は、『梧陵伝』を執筆するにあ

たって、巻頭語で資料収集に協力してく

れた人々に対して謝辞を述べています。そこに伝八の名はありませんが、『梧陵伝』の「十、海嘯襲来」の項には「夏の夜かたり」と同じような文章がところどころ出てくるので、楚人冠は「夏の夜かたり」の記述も参考にしたと考えられます。

◆ジャパンサーチでの公開

令和二年八月二十五日、国立国会図書

館によるジャパンサーチの運用が始まり

ました。ジャパンサーチとは、書籍、文

化財、メディア芸術など、多様なコンテ

ンツをまとめて検索できる「国の分野横

断型統合ポータル」です。

当館からは、「渋谷家文書」と当館所

蔵の「和歌山県宮繕技師増田八郎関係資

料」を公開します。

（砂川 佳子）

耐久高校所蔵 「耐久梧陵文庫」

◆耐久高校と耐久梧陵文庫

和歌山県立耐久高校は、濱口梧陵らが嘉永五年（一八五二）に設立した、「稽古場」は、梧陵のほか地元有力者であった、濱口東江、岩崎明岳の協力によって創設されました。慶応二年（一八六六）には名称を「耐久社」と改め、規則のほか学則と掲示が発表されました（表紙写真）。その後、学制の改革や私立から県立へと変遷を辿りながら、二年後の令和四年には、創立一七〇周年を迎えます。

表1 耐久高校の歴史（抜粋）

Table with 3 columns: Year (年号), Western Calendar (西暦), Name (名称). Rows include 嘉永五年 (1852, 稽古場), 慶応二年 (1866, 耐久社), 明治二十五年 (1892, 耐久学舎), 明治四十一年 (1908, 私立耐久中学校), 大正九年 (1920, 和歌山県立耐久中学校), 昭和二十三年 (1948, 和歌山県立耐久高等学校).

「耐久校史」をもとに作成

「耐久梧陵文庫」は、明治期に活躍した地元の有力者によって寄贈された書籍の総称です。地域の偉人である濱口梧陵にちなんで名付けられました。

これらの書籍は、耐久高校において長く大切に保管されてきましたが、平成二十五年（二〇一三）から和歌山大学橋本唯子准教授の指導のもと、耐久高校生徒及び教員、同窓会の皆様に加え和歌山大学生と当館職員も参加して、資料整理とデータ入力が行われ、三、四七〇冊の書籍が目録化されました（写真1）。



写真1 資料整理の様子

◆濱口容所による寄附

これらの書籍の多くは、東濱口家の九代当主であった吉右衛門（号「容所」）によるもので、二四九冊が数えられます。

容所は文久二年（一八六二）に生まれ、成長して慶応義塾大学で学び、家業の醤油醸造業を発展させました。また、耐久社を設立した祖父東江の遺志を継ぎ、耐久学舎舎長を勤めていたところ、明治四十一年（一九〇八）中学校令の発布に伴い、私立耐久中学校校長となりました。現在も校訓として掲げる、「真・健・美」が定められたのは、この時のことです。

真…真理を研究し言行を誠実にすべし  
健…身心を鍛練し意志を鞏固にすべし  
美…情操を涵養し徳義を尊重すべし

容所が寄附した書籍には、「御風楼」という蔵書印が押されているものが多数あります。「御風楼」というのは、容所によって明治四十二年（一九〇九）頃建てられた三階建ての和風建築です。国の重要文化財に指定されており、「平面構成、内部意匠、細部造作ともに獨創性に富んでおり、価値が高い。」と評価されています（写真2、3）。

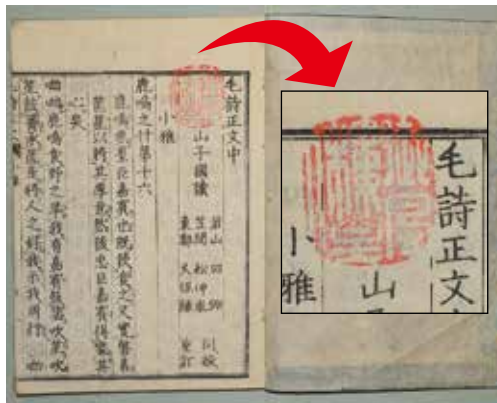


写真2 「毛詩正文」と「御風楼」の蔵書印



写真3 国重文東濱口家住宅のうち御風楼（写真提供 広川町）

◆公開する資料

「耐久梧陵文庫」は大部に及ぶことから、次の5点をデジタル化しました。これらは令和二年十一月五日の世界津波の日にあわせて公開予定です。

貞観政要

中国唐の皇帝太宗の言行録で、帝王学の指南書として知られています。本書は、紀州藩の藩校学習館所蔵のものを校訂し、文政六年（一八二三）和歌山の本屋（総田屋平右衛門、帯屋伊兵衛）から出版されたものです。

落葉の錦

嘉永三年（一八五〇）に紀州藩に仕えた国学者である、本居宣長・大平の遺墨を中心とした展覧が行われた際の図録です。和歌山において兄弟で本屋を営んでいた、阪本屋喜一郎・大二郎により出版されました。

小学纂註校本

明治十五年九月に出版された『小学』という経書の注釈本です。日常の礼儀作法や格言、善行などを集め、初学者用の教科書として用いられました。

毛詩正文

「毛詩」とは、四書五経のうち「詩経」の別称で、「正文」とは、文書の本文を意味します。裏表紙に容所の幼名「勝之助」が記されています。

古今銘

古今の名だたる刀剣の鑑定書です。万治四年（一六六一）版のものは、他機関での所蔵も少なく、インターネット上で公開は初めてとなります。

（砂川 佳子）

串本古座高校所蔵  
「中根文庫」

◎中根七郎の経歴

中根七郎は、明治四年（一八七二）に和歌山市で誕生、同二十八年（一八九五）結婚を機に中根家へ入りました。日高郡役所を皮切りに、和歌山県庁、東牟婁郡の公務員として勤務し、新宮銀行支配人となつて公務を離れますが、大正十二年（一九二二）古座町助役として公職に復帰、昭和四年（一九二九）まで勤めたのち、古座酒造会社支配人を最後に引退しました（表1）。

表1 中根七郎略歴

年号	西暦	年齢	出来事
明治四年	一八七二	0	四月十三日遠藤一郎の五男として和歌山市元寺町に誕生
明治一〇年	一八八七	16	日高郡役所雇員となる（十一月末辞職）
明治三年	一八八八	18	和歌山県庁雇員となる
明治八年	一八九五	24	中根家の嗣となる
明治九年	一八九六	25	東牟婁郡書記となる（大正二年まで）
大正二年	一九一三	42	新宮銀行支配人となる（大正十年まで）
大正十年	一九二二	52	古座町助役となる（昭和四年六月まで）
昭和四年（昭和元年）	一九一九	59	古座酒造会社支配人となる（昭和八年十一月まで）
昭和十一年	一九三六	65	京都市に転住
昭和三年	一九五七	86	七月二日、死去

〔校訂〕古座史談』及び橋爪啓「中根七郎先生のこと」和歌山県史編纂委員会編『和歌山県史研究』第7号をもとに作成

◎中根文庫と串本古座高校

中根文庫は、七郎が収集・書写した二〇一点にのぼる書籍の総称です。七郎は、古座町に勤務していた頃、『東牟婁郡誌』編さんに関わつたことから、郷土の歴史に興味を持ったようで、事実『東牟婁郡誌』編纂頭末にも「中根七郎は公務性惚の裡に在りて資料蒐集の任に当たれり」と、公務多忙のなか郷土資料の収集に尽力したことがうかがえます。

七郎の没後、書籍は和歌山県立古座高校へ寄贈されましたが、串本高校との統合により、現在は串本古座高校で大切に保管されています。

◎中根文庫の特徴

『東牟婁郡誌』を編さんするため七郎は、助役を勤めた①古座周辺、②新宮領、③田辺領、④紀州藩（現在の三重県を含む）と広範囲に及ぶ資料を集めました。その内容は、土地の歴史や文化、宗教、災害、動植物など多岐に渡ります。

なかでも②新宮領に関する資料では、本書ハ養祖父カ新宮県ニ奉職中新宮藩庁の旧記を写し置かれたるものなることハ筆跡と末尾の年号によりて知らる

外ニ新宮藩士の食禄を写したるものにて蠹魚の蝕甚しきものありて辛して改写し置きたり

右等にて考ふれば此他に旧記の写したるもの少なかりしならんニ  
も散逸したるならむ惜むべきなり

つまり、七郎の養祖父で新宮藩士であった徳左衛門正晃が、新宮藩で会計掛

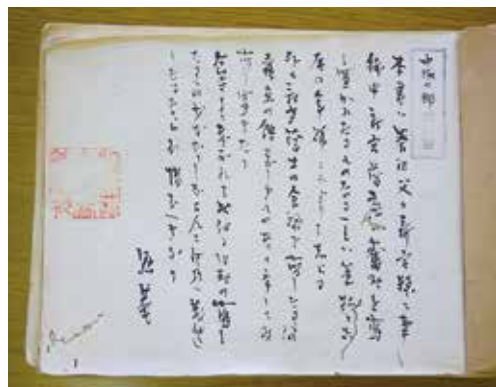


写真1 「新宮藩御勘定方旧記」  
(中根文庫 資料番号4073)

をつとめていた頃に新宮藩庁で保管していた古い記録を写し置いたものであることは、筆跡と末尾の年号によってわかる。この旧記のほかに新宮藩士の禄高を写したものは、シミによる虫損が甚だしいものもあって、これは辛うじて写し置いたものである。右のように考えれば、このほかにも古い記録を写したものが少なくなかったと思われるが、どれほど散逸してしまつたのか、惜しむべきことである、と記しています（写真1）。

明治の世になつて不要とされた文書は、虫に食われたり、天災に遭遇したり、捨てられたりして、原本が失われてしまったものもあります。しかし、七郎が写し取つていたため、現在もその内容を知ることができるのです（表紙写真）。

◎郷土史家との交流

「新宮藩御勘定方旧記」以外でも、七郎は文書の冒頭やあとがきに、原本の所蔵者や入手経路のほか、何年何月何日から何日までかかつて筆写した、というこ

とを詳細に記録しています。

交友関係で目立つのは、田辺の宇井縫蔵と日高の森彦太郎の二人です。両者とも教員をしながら、郷土史研究をしていました。

宇井縫蔵とは頻りに本の貸し借りをしており、田辺市立図書館で所蔵する宇井文書のリストを見ても、中根文庫と重複するものが多々見られます。

森彦太郎からは、署名入りの『紀州文献日高近世史料』をはじめとした印刷刊行本を贈呈されており、郷土史家のネットワークを知ることができます。

◎コピー機のない時代に…

先ほど、中根文庫は七郎が収集・書写した書籍と紹介しましたが、約二百点のうち、半数以上が筆写本、つまり、七郎みずから一字一字書き写して複製品を作つたのでした。コピー機のなかった時代、それしか方法がなかったとはいえ、郷土の歴史に対する七郎の情熱には、頭が下がるばかりです。

最後に、「熊野史関係書目」（一三八七二）に七郎が記した、郷土史に関する見識をご覧にいれましょう。

- ・郷土史資料ノ蒐集ハ中々多クノ労力ト時間トヲ要ス
- ・修史ハ勞力アレハ誰ニテモ出来ルモノニ非ス
- ・書籍ハ（略）損シヌ様大事ニ扱ヒ保存シタシ必要ナル人ニハ与ヘテモ可ナリ
- ・書籍ハ貸サヌコト也 返サヌ人多シ
- ・苦勞して収集した資料が返却されず、悲しい思いをしたようです。

（砂川 佳子）



今年、令和二年は濱口梧陵（一八二〇～一八八五）の生誕から二〇〇年にあたる年です。

県立図書館と文書館では合同で七月十八日から十二月二十七日まで「濱口梧陵と梧陵文庫」と題し、企画展を行っていますので、その内容を紹介します。

①「濱口梧陵の事績」パネル展示（写真1）  
濱口梧陵の生涯と活躍をテーマにしたパネル展示を開催しています。（会場：エントランス 七月十八日～八月十二日、一階図書館閲覧室 八月十四日～十二月二十七日）



写真1 「濱口梧陵の事績」パネル展示

②「濱口梧陵文庫」パネル・ケース展示  
「濱口梧陵文庫」は、平成二十四年に

子孫の方から寄贈された梧陵の蔵書約五、七〇〇冊です。濱口梧陵は地理、絵図、歴史、漢詩、海防関連など幅広い分野に興味を持ち、収集しました。蔵書の規模は幕末から明治初期において民間人としては日本有数のものであったと考えられます。

一階図書館閲覧室パネル展示（写真2）では「濱口梧陵文庫」の規模や書籍にまつわる梧陵の交友関係、梧陵の蔵書印など文庫を知る上での基本情報を紹介します。

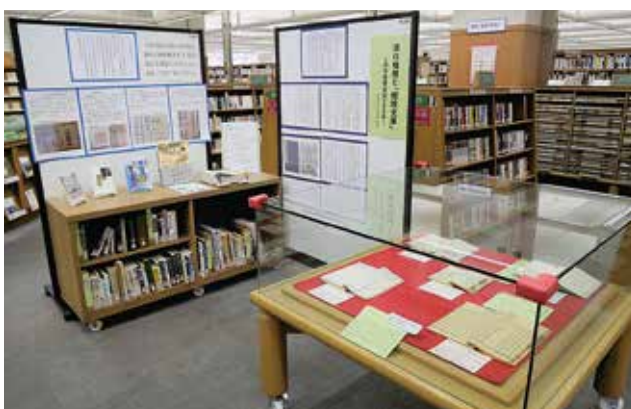


写真2 「濱口梧陵文庫」1階図書館閲覧室展示

二階文書館パネル展示（写真3）では、「濱口梧陵文庫」の代表的な書籍を次の五つのテーマに分けて紹介します。

- ・「漢籍 歴史書」  
梧陵の書込みがある『資治通鑑』等
- ・「漢籍 地理書」



写真3 「濱口梧陵文庫」2階文書館パネル展示

梧陵の書込みがある『海国図志』等

- ・「漢籍 濱口梧陵文庫の至宝 武英殿本」  
中国屈指の精密な出版物『万寿盛典図』（写真4）や乾隆帝所蔵青銅器図録『西清古鑑』等
- ・「和本 古碧吟社と菊池海莊」  
湯浅・広地方の文化人等が結成した漢詩結社「古碧吟社」（写真5）や、同社の代表的詩人菊池海莊編著の漢詩集
- ・「和本 海防・兵書関係書籍」  
菊池海莊や梧陵の活動と直結する海防・兵書等

期間中各テーマの実物資料を図書館及び文書館で三期にわけてケース展示しています。



写真4 「万寿盛典図」



写真5 「古碧吟社小藁」

これらの書籍は梧陵の活躍の裏に彼自身や地域社会の高い文化水準があったことを現代に伝えるかけがえのない資料群です。この機会にぜひご覧ください。

（和歌山県立図書館 松本 泰明）

令和元年度新収古文書の紹介

令和元年度に当館が寄贈及び購入によって新収した古文書の概要を紹介いたします。これらについては、今後番号付け、目録作り、複製物作成など、皆様に利用いただくための整理を進めていきます。なお、整理中の文書は、出納に時間がかかったり、御利用になれなかったりする場合があります。御利用にあたっては、事前に当館に御連絡ください。

巽三郎旧蔵文書

考古学者で県史専門委員等を務めた故巽三郎氏の遺品(採集・収集した考古・歴史資料)のうち、古文書約二〇〇点を寄贈いただきました。

①「覚源抄」一点

文応元年(一二六〇)写

②「蟻行書云々文書」一点

嘉永七年(一八五四)十月四日、加太(現和歌山市)で異国船(ロシアのプチャーチン一行)を応接した際に通訳に動員された名屋浦(現御坊市)の漂流人江崎太郎兵衛に書かせた欧文

③「井上家古文書」約一五〇点

伊都郡端場村(現橋本市高野口町伏原)の庄屋・副戸長等を務めた井上家の古文書で、同村検地帳・名寄帳、同村内浄土真宗寺院(蓮香寺・大光寺)関係文書、天保十五年(一八四四)から大正五年(一九一六)の村内外の重大事件を書き上げた「非常録」など

④「岡本家古文書」一三点

印南町東山口の岡本氏旧蔵の東山口村山上講文書八冊(木箱入り)・下張文書三点(三箱分)

昭和十九年二月稲原村会公文書一冊・郷土教育資料 稲原尋常高等小学校(稲原村勢)一冊

⑤菊池海莊書簡 一点

⑥海防図 一点

令和元年和歌山県外交史料展「外交史料と近代日本のあゆみ」出陳

⑦「紀伊国七郡地土名寄 畠山殿次第」一点

⑧「地所売渡証文(西牟婁郡田辺中屋敷町)」明治十五年 一点

⑨「鎌倉時代の経典」九点

⑩写本・板本・古新聞 約三〇点

なお、「和歌山県古文書目録Ⅳ」(昭和五十一年)に巽家文書一二二件の目録が収録されていますが、上記のうち、同日録収録が確認できるのは①及び②の二点のみです。また、考古資料(出土遺物)のうち日高郡域のものは御坊市教育委員会が受け入れ、それ以外の考古資料は県立紀伊風土記の丘が受け入れています。

中川皎資料(有田川町清水)

明治末期から昭和四十年代に亘り、旧有田郡八幡村・清水町で教師・郵便局員の傍ら郷土史家として活躍した中川皎が作成・取得した三二点が寄贈されました。このうち、「明治四十二年郷土誌編纂

二関スル件 八幡村」(公文書)及び「昭和四十二年度第一回清水町文化財保護審議委員会」の資料を除く三〇点は、全て中川が地元特産の保田紙に墨で記入し、製本して作成したものです。内容は、中川が調査した記録や草稿、発表稿や古文書の写し等で、旧清水町域における紙漉きを行った家の調査記録などもあり、貴重です。

なお、中川旧蔵で、親戚の彫刻家建畠大夢から贈られた大黒天の小像が県立近代美術館に寄贈されています。

有田川水害古地図(花園村災害調査図)

昭和二十八年水害での旧花園村域の被害状況が記された八四cm×一一二cmの地図で、村民坪井初太郎氏によって製作されたものです。ほぼ同内容のものが二枚あります。

旧同村役場に保管されていましたが、複製が作られ、原本がかつらぎ町長から文書館に寄贈されました。



紀州口六郡大庄屋杖突帳書姓名付

文久元年(一八六一)時点のものとされる、紀州藩領のうち口六郡(伊都・那賀・名草・海士・有田・日高の各郡)及び和州領(三か村)の大庄屋・杖突・帳書・胡乱者改・在鳥見(各助役も含む)の姓名を書き留めた帳面一冊です。古書店から購入しました。

紀州藩士古屋家文書

天明五年(一七八五)以来小姓として、隠居した紀州徳川家第八代藩主重倫に仕えてきた古屋三兵衛相延は、寛政十一年(一七九九)、小姓頭となり、三〇〇石の知行取りとなります。この時の知行目録を保管するために作られた木箱に入った、同家の古文書約四〇点を古書店から購入しました。

内容は、三兵衛以下三代の知行目録や、同家の系譜、親類書、勤書、屋敷図などですが、系譜は当館蔵「紀州家中系譜並に親類書書上げ」にないものです。

また、相延が天明六年五月から六月にかけて、第六代藩主宗直、第七代藩主宗将及び重倫の蔵書を、重倫が仕分けして一部を第九代藩主治貞及び後の第十代藩主治宝に分与する作業を手伝い、その過程で「甚御大切之御帳面」を極秘裏に焼却したことなどを記した「日々勤覚」や、寛政九年・十年、重倫の妻(慈護院)が、娘である京都の関白一条家の大政所(懿姫)を訪問したのに同行した際のこと、同年重倫が内々に高野山を参詣したことなどを記録した「勤書并覚書共」が、特にユニークな文書といえます。

令和元年度  
公文書の引継・収集

文書館には、和歌山県庁の永久保存文書のうち、事案完結後二〇年を経過したものが引き継がれます。また、知事部局・県議会事務局・選挙管理委員会・監査委員事務局・労働委員会事務局・収用委員会・海区漁業調整委員会・内水面漁場管理委員会が保存期間満了により廃棄する有期限文書のうち歴史的価値があるものを選別し「歴史文書」として収集しています。

令和元年度に文書館に引き継がれた永久保存文書は五四八冊です。平成五年開館以降の累積冊数は、一三三、四九八冊になりました。

歴史文書の収集冊数は六〇八冊で、そのうち四八七冊が知事部局本課から収集したものです。この年、和歌山県全体では、合計一八、〇一六冊の文書が廃棄されていますので、そのうちの二・七%が、歴史文書ということになります。開館以降の歴史文書の累積冊数は、八、六〇六冊です。

これらの文書は、文書館で保存・整理され、事案完結後三〇年を経過し、且つ個人情報保護などの問題がなくなったものから御利用いただけるようになります。なお、永久保存文書のうち、個人情報記載されているものなどについては、情報公開制度に則り、県庁情報公開コーナーでの御利用になります。

令和元年度文化庁補助金事業  
地域に眠る「災害の記憶」と  
文化遺産を発掘・共有・継承する事業

文書館は平成二十六年度以降、県立博物館、県教育庁文化遺産課、民間団体「歴史資料保全ネット・わかやま」や県内外の研究者と共同して文化庁補助金事業「地域に眠る『災害の記憶』と文化遺産を発掘・共有・継承する事業」を行っています。

この事業は、和歌山県内の地震・津波・洪水など過去の災害に関する記録や記念碑、言い伝えなどを調査して今後の教訓とし、併せて地域の古文書、仏像、祭礼など文化財の確認も行い、将来の災害への備えや、近年増加している盗難対策とするものです。

平成三十年度までは毎年対象地域を絞って実施し、事業の成果は、現地学習会の開催や、対象地域全戸配付の冊子を発行するなどして、地元へ還元しています。

令和元年度は対象地域を絞らず、前年度までの調査の追加調査などを行うとともに、冊子『災害の記憶』を未来に伝える「和歌山県の高校生の皆さんへ」を発行し、県内全高校に配付しました。



文書館の利用案内

■利用方法

◆閲覧室受付にある目録等で必要な資料、文書等を検索し、閲覧申請書に記入のうえ受付に提出してください。文書等利用の受付は閉館30分前までです。



◆閲覧室書棚に配架している行政資料、参考資料は自由に閲覧してください。複写を希望される場合は、複写承認申請書に記入のうえ受付に提出してください。複写サービスは有料です。

■開館時間

- ◆火曜日～金曜日 午前10時～午後6時
- ◆土・日曜日・祝日及び振替休日 午前10時～午後5時

■休館日

- ◆月曜日 (祝日又は振替休日と重なるときは、その後の平日)
- ◆年末年始 12月29日～1月3日
- ◆館内整理日
  - ・ 1月4日
  - ・ (月曜日のときは、5日)
  - ・ 2月・12月第2木曜日
- ◆特別整理期間 10日間 (年一回)

■交通のご案内

- ◆JR和歌山駅・南海電鉄和歌山市駅からバスで約20分
- ◆和歌山バス高松バス停下車徒歩約3分



ホームページアドレス  
<https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/monjyo/>  
和歌山県歴史資料アーカイブアドレス  
<https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/monjyo/archive/index.html>

和歌山県立文書館だより 第58号

令和2年9月30日 発行  
編集・発行 和歌山県立文書館  
〒641-1005  
和歌山市西高松一丁目七-三八  
きのくに志学館内  
電話 〇七三-四三六-九五四〇  
FAX 〇七三-四三六-九五四一  
印刷 有限会社阪口印刷所